

オーケストラにおける意識行動
サークル活動をとおしてみる人間集団

学籍番号 2024 番 河田 瑛里
指導教授 立木 茂雄

目次

1 はじめに

- 1.1 オーケストラという集団
- 1.2 問題設定 二つの視点
 - 1) 楽器
 - 2) 役職(役割)
- 1.3 仮説
 - 1) 弦楽器と管楽器(セクション)
 - 2) 役職の経験
- 1.4 調査枠組み
- 1.5 研究が明らかにするもの

2 先行研究

- 2.1 楽器の特徴・仕事
- 2.2 実際の奏者・音楽関係者の声

3 調査方法

- 3.1 調査対象 同志社交響楽団
 - 1) 概要
 - 2) 楽器構成
 - 3) 団員構成
 - 4) 組織
- 3.2 調査用具 質問紙
 - 1) 調査項目の作成
 - 2) 下位概念の設定
- 3.3 質問紙の配布

4 同志社交響楽団の実態

- 4.1 調査結果の得点化
- 4.2 箱ひげ図
- 4.3 考察
 - 1) セクション
 - 2) 役職
 - 3) その他

5 おわりに

1 はじめに

1.1 オーケストラという集団

私はこれまで中学・高校・大学とクラブ（サークル）活動においてオーケストラに所属しヴァイオリンを弾いてきた。オーケストラは多くの人数を必要とする。つまり私は学校のクラブ活動といえども常に 100 人前後の人間に囲まれて過ごしてきたことになる。このようなクラブ活動にしてはかなりの大所帯で生活するうちに、私はオーケストラについて「人が多く華やかに思えるが、内部はオケ（オーケストラ）人間の間の微妙なズレがそこから中に散らばっているなんとも言えない特殊な集団」といった印象を持つようになった。自分自身 10 年間どっぷりとオーケストラの生活に浸っているため知らず知らずのうちに受け入れてしまっていることもあるはずなのである。「オーケストラ」というものは、一見ひとつの音楽を皆で創り上げているように見えて、実は内部はわりとアンバランスなのである。私が抱くこの疑問は多くの人を持っていると思う。しかし、そのアンバランスによってかえってうまく機能しているような気がしてならない。

オーケストラに限らなくても、ある種の組織というものには複雑な体系や内部事情がある。しかし楽器を媒介にするというある種の特殊技能を持つ 100 人以上もの人々が集うオーケストラにおいて、楽器や複雑な組織体系が人々に与える影響はどのようなものであるのか、オーケストラには何か特殊なものが備わっているのではないか、ということを知りたいと思うようになったことがこの研究の根本にある。

1.2 問題設定 二つの視点

前節で少しふれたが、オーケストラとはある種の集団、組織である。日本の第一線で活躍する NHK 交響楽団のオーボエ奏者である茂木大輔氏はオケマンについて次のように述べている。

いずれもひと癖ある特殊技能者の集まりでありながら、集団でなければ成り立たないというところに、オケのおもしろさやバさがある（茂木大輔 2000）。

このことはつまり私が 1.1 で少し述べた、「一見ひとつの音楽を皆で創り上げているように見えて、実は内部はわりとアンバランスなのである」という思いと一致している。茂木

は、続けてこのようにも述べている。

あまりにもたくさんの方がいるので、主体性や参加意識が薄れ、責任もヨロコビも百分の一、所詮いくらやっても他人の成功、というクールでヒガミっぽいところがあるのも、オケマンの特徴である（茂木 2000）。

たくさんの方の集まりであるがために行動や意識に差がうまれることは当たり前のことである。そこで今回は私が今現在所属している同志社交響楽団というサークルを中心に、非常に狭い範囲での考察になるが、サークル活動という枠における学生のオーケストラへの取り組み方の違いをみていきたい。

まずは私が日頃サークル活動を通じて感じている団員の取り組み方の違いを考えてみた。そして、「オーケストラにおける団員の取り組みは、楽器(パート)や役職によってその意識や行動に違いがあるだろうか」という問題設定をした。以下にその理由を述べる。

1) 楽器

一つ目は担当楽器(パート)による差である。私はふだん弦楽器の人と管楽器の人の意識の差をよく感じる。これは、一人一人に与えられる仕事に対する責任感の違いから来ていると私は感じる。巻末で、オーケストラにおける楽器の役割・仕事・特徴については詳しく述べるため、ここでは簡単に述べることにする。オーケストラにおいて大きな編成の曲を演奏する際、管楽器(木管楽器、金管楽器、ここでは打楽器も含むものとして考える)は、一人一人が1パートを担当する。しかし、弦楽器は数人ないし数十人が集まってはじめて1パートとなる。

実際私が経験していることは、弦楽器の人たちの方が練習の遅刻者や欠席者が多いという事実である。また、Tutti(全員での合奏)で、管楽器の1人が指揮者の先生に注意を受けていたとすればそれは先生1対管楽器奏者1であるが、ヴァイオリンの場合は先生1名対パート員十数名という図式になる。この時私は「管楽器の人は1人だから大変やなあ。」という他人事のような考えをしてしまうことがよくある。反対に「(譜面の)休みが多くて暇。」という管楽器の人たちの声もしばしば聞く。それどころか、「(自分の出番までの休みが長いので)本番舞台の上で寝かけた。」などという驚きの声を聞いたことすらある。これはつまり楽器を演奏する際に一人一人が感じる責任感やプレッシャーなどというものに大きく関係し、つまりはオーケストラに対する団員の取り組み方にも大きく影響を及ぼす要

因になっているのではないかと考える。

2) 役職 (役割)

二つ目に注目したい点は、オーケストラが一つの「組織」であるという点である。そういった点では私が仮定するこの二つ目の要因はあらゆる企業や団体にもあてはまる当たり前のことであろう。私は3回生であった昨年一年間、ヴァイオリンパートのトップという重要な役職を経験した。同志社交響楽団の組織構成については巻末で述べるが、パートのトップという、企業でのいわば部長クラスの役職を経験したことにより私はオーケストラに対する取り組み方や考えがそれまでと大きく変化した。3回生の時は練習を休む事などほとんど無かったし1、2回生の頃に比べ断然積極性が増した。4回生である現在は、トップを経験したというある種の運営に対する責任感や我が子(後輩)を見守る母親的な気持ち大きい。つまり、オーケストラを運営するにあたり、何らかの重要といえる役職についての経験の有無や関わりがその人の意識や行動に大きく影響するのではないかと考える。

1.3 仮説

1.2 では大きく二つの問題を設定した。1) 楽器、2) 役職である。ここでは、設定したこれら二つの問題から具体的な調査仮説を立てたい。

1) 弦楽器と管楽器 (セクション)

楽器(パート)によって差があるにちがいない、ということは1.2で述べたとおりであるが、その中でも私がもっとも違いを感じている点は、繰り返し述べることになるが、セクションによる差である。つまり、弦楽器の人と管楽器の人との意識の差である。特に、練習への参加や態度に関してはつい先日も「今日は弦楽器の人がたくさん来ているし珍しいね」などという皮肉たっぷりの言葉を管楽器の人に言われたばかりである。よってここでは「弦楽器の人の取り組み意識は、管楽器の人よりも低い」という仮説をたてる。

2) 役職の経験

役職という点に注目した理由は1.2で述べた。それは私自身の経験に基づいていることも述べたとおりである。同志社交響楽団では、3回生がその一年をとおして団の中心になって運営を進めていくきまりになっている。よって役職のほとんどは、3回生になってからしか経験できないものであり、何らかの役職に携わる人とそうでない人との意識や行動の差は大いに期待できるのではないかと考える。特に同楽団においては、練習の内容や予定を決め、中心になって進めていくのは「技術系」(コンサートマスター、セクションリー

ダー、パートトップ)といわれる役職に就いている人たちであって、練習に関することはほぼ彼らを軸に進めているといっても過言ではない。よってここでは「何らかの重要な役職に就いている(就いたことのある)人は、取り組みへの意識が高い。それが特に練習参加というカテゴリーに絞った場合、技術系への関わりが深い人ほど意識が高い。」という仮説を立てる。

1.4 調査枠組み

この節では、仮説における原因(楽器と役職)と結果(取り組み)をどのような変数によって表すのかという調査のデザインを述べる。図1は、1.2の基本となる問題意識を図式化したものである。

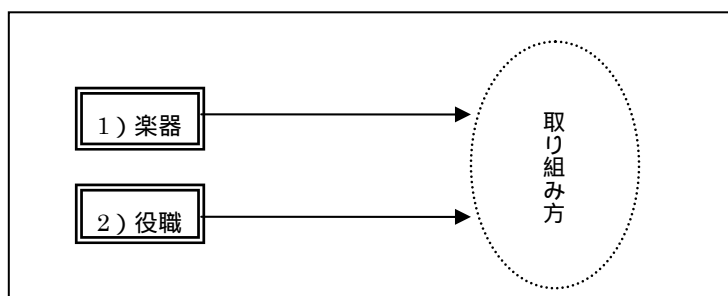


図1 問題の図式化「楽器や役職によってその意識や行動に違いがあるだろうか」

まず、仮説の原因となる楽器と役職については対象となる同志社交響楽団における本人の属性や特性をそのまま採用する。しかし本調査では、仮説1)を調べる際、「弦楽器・木管楽器・金管楽器(打楽器)」という3セクションに分ける。細かなセクションの内訳については3.2の2)楽器構成を参照いただきたい。また、仮説2)においては、役職経験の細かな特性として技術系など「経験した事のある役職」についても分類し、考察していこうと思う。また、設定した仮説以外の細かな特性との関連をみていくことができればと思う。

次に、取り組み方をどのような変数によって調べるのかということである。つまり、オーケストラにおける団員の取り組み(行動や意識)の違いはどのような指標によって表されるのかという本調査における概念をつくるため、次の操作をおこなった。

ランダムに選んだ団員6~7名に「同志社交響楽団で感じる団員間の意識や行動の差」という題のもと、自由に意見を出してもらおうというKJ法形式の調査をおこなった。その

調査によって出た結果と私の考えを総合したものを大きなカテゴリーに分類したものが、表1の5つの構成概念である。本調査では、「楽器」「役職」とこれら5つのカテゴリー（構成概念）との関連を中心にみていきたい。

今回の調査では、これら5つの構成概念をもとに、各概念にあてはまり、調査対象者が「そう思わない」=1、「どちらかといえばそう思わない」=2、「どちらともいえない」=3、「どちらかといえばそう思う」=4、「そう思う」=5といった5段階の間隔尺度によって答えることのできる質問項目を考える。間隔尺度を用いる理由は、その尺度をそのまま得点とみなして合計点を計算し、概念に対する行動や意識レベルを得点化するためである。その得点が大きければ大きいほど、オーケストラへの取り組みに対する意識は高いということがいえる。

表1 団員の取り組み

概念	補足
基本的な熱心さ・意欲	練習への参加や態度を通して見る熱意。
団の運営への関わり	演奏面や主な練習以外での団との関わり（実務面など）、 団の運営への興味、関心。
音楽性の追求	普段の練習で行うことや必要とされること以上のものを得る ために取る意識や行動。 積極的に音楽の幅を広げようとする行動。
人間関係	団内の人間同士における相互コミュニケーションの有無、 またはそれらの関係における満足度。
サークル活動への姿勢	サークル活動（オーケストラ）そのものの捉え方や姿勢。 活動に目標を持って取り組み、重きをおいているか。

1.5 研究が明らかにするもの

私がこの研究をするに至った経緯はこれまでに述べたとおりであるが、この研究が意味するところは、音楽というかたちのないものを扱う人々の意識行動である。残念ながら、この種に関する学術的な研究はこれまであまりされてこなかったといった方がいい。しかしながらそれは同時にこの種の「音楽と人間」とった内容の研究は難しいテーマといえるのであり、研究のしがいがあるといえるのではないだろうか。

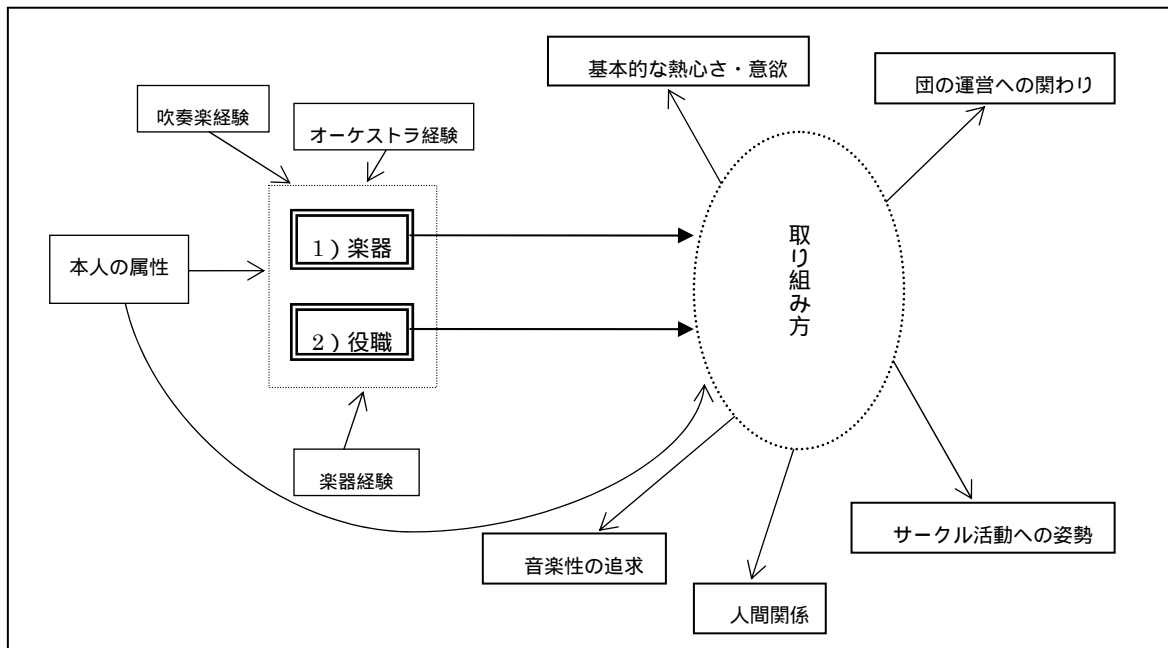


図2 図1の具体化

2 先行研究

1.5 で述べたとおり、この分野の研究となる適切な論文等の材料がないため、さまざまな著書や雑誌の中での楽器奏者などの発言をもとに楽器や役職に関する考えをまとめていきたい。

2.1 楽器の特徴・仕事

オーケストラにおける楽器特徴などについては、巻末を参照していただきたい。

2.2 実際の奏者・音楽関係者の声

文献等から、実際に音楽に携わっている人の楽器やオーケストラについての考えを抜き出し、表を作成した。表2は「楽器に関するコメント」であり、オーケストラにおけるその役割やその楽器を担当する人物の人間性について述べている部分をピックアップしたものである。表3は、「オーケストラに関するコメント」であり、オーケストラというものについて、オーケストラで演奏するということについて述べているものである。ここでいう属性とは、その意見を述べている人物の属性（担当楽器など）のことである。また、こ

これらの楽器奏者のほとんどはプロである。

表2 楽器に関するコメント

属性	意見・コメント・会話
アマチュア奏者	弦楽器は複数の奏者がいることが特色であり、弦の音色を生み出す重要な要素となっている。 一個のヴァイオリンの音だけでは、いくら重ねても合奏の音にはならない。 Tutti は気楽に座っていられる練習。(指揮者に自分が指摘される機会が減るから)。 管楽器はパートというよりも個人の技量に左右される。
フルート(ピッコロ)奏者	プライトのある人はフルート奏者。 ピッコロは出番が少ない分そこにすべてを賭ける。花火師のようなもの。
コントラバス奏者	すぐに評価してもらえるような楽器ではない。
第2ヴァイオリン奏者	滅多にまわってこないメディアへの思い入れは第1とは比べものにならない。 弦は個人技術よりも、合わせるが大変。奏者の感性によって何通りもの弾き方がある。 第2ヴァイオリン一筋の人は、角が取れてまいる性格。第1は一本気。
トランペット奏者	影響力の大きな楽器であるから、周りへの配慮が必要。
クラリネット奏者	クラリネットには温和な人が多い。楽器の役割と同じように調和できる性格。
打楽器奏者	打楽器は脇役。でもないとい物足りない存在。
フルート奏者・助教授	フルートは和音が作れないので、一人で吹いてもつまらない。
ファゴット奏者	竹の中の刃というのは、その場面の景色、言葉である。 楽器が人の性格をつくるといって、選んだ時点でその性格をしている。
チェロ奏者	竹でしか(大人数の中でしか)できない醍醐味がある。
コンサートマスター	竹の花形ラインは「コントラバス→フルート→オーボエ→トランペット→ティンパニ」
ホルン奏者	楽器の役割や丸い形の影響か、性格は調和。包容力。
オーボエ奏者	オーボエは不完全な楽器。 オーボエ奏者というのは、Tutti を吹きながら自分の刃を待っている人種。
音大助教授	コンサートマスターは竹全体の責任を負う。

表3 オーケストラに関するコメント

属性	意見・コメント・会話
フルート奏者・指揮者	竹の練習は時間と空間を共有する場所。 人は皆考えや価値観が違うと言う事を認めなければならない。 竹のメンバー全員が同じではないものではない。 演奏するということは、自分の意思を人に伝えるということ。 技術をいくら習得しても表現の欲求がなければ音楽にはなり得ない。 演奏するということは、自分の意思を人に伝えるということ。
アマチュア奏者	演奏の出来の要因をさまざまな面から考察してみることは大切である。 帰属する人の、人間としての在り方ものの考え方などによって、各々のカーは違う。 一つ一つの考え方を満足させることは不可能である。
音楽評論家	楽しく練習、しかも上達に挑戦するのがアマチュア・竹。 竹には一人で楽器を弾いては味わえない楽しさ、喜びがある。 仕事は幹事任せ、演奏は主席任せでは何のための竹か分からない。
ヴァイオリン奏者	竹は100人で作るものだからうまくいかないことも多い。でもうまくいった時の喜びはすごい。

表2を見ると、やはりパートによってオーケストラの中における役割意識は大きく違うようである。「管楽器は個人の技量に左右される」という意見と対照的に、「ヴァイオリンは合わせることが大変」という意見もある。各パートによる人間性の違いもよく出ているようだ。それはその人が担当する楽器がオーケストラにおいてどのような働きをしているかによって、性格にも多少なりとも影響を与えるということであろうか。大人数が一緒になってはじめて“オケ”になるのだという意見も見られる。表3を見ると、オーケストラにおける人間の集まりについて述べているものが多い。つまりは、100人いたとしたら、そこには100以上の価値観や考えが存在するということである。そしてそのように一人一人違う価値観を持っているからこそ、素晴らしい音楽ができるのだという。これは演奏をするということの意味につながってくることであろう。

以上のことをふまえて、調査を進めた。

3 調査方法

3.1 調査対象 同志社交響楽団

1) 概要

私が今回調査対象とする同志社交響楽団は、同志社大学におけるサークルの一団体である。当然のことながら、同楽団はプロとオーケストラとは違い、アマチュア・オーケストラの部類に所属する。図3は、社会における文化（芸術）という範疇で同楽団が位置するところを図式化したものである。

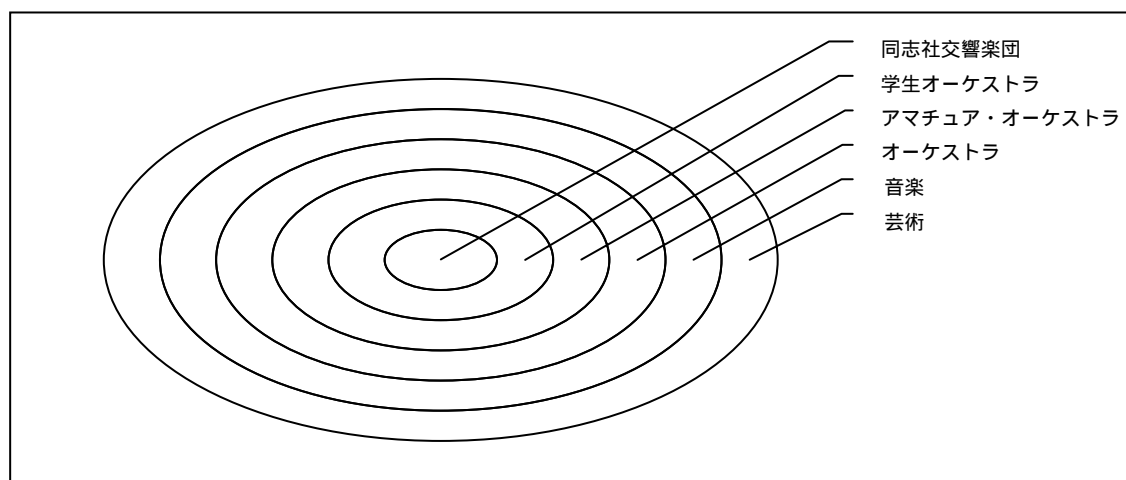


図3 同志社交響楽団の位置するところ

2) 楽器構成

オーケストラは、大きく分けて三つの楽器セクションにより構成されている。楽器についての詳しい説明は巻末を参照していただきたい。同志社交響楽団における分類は表4の通りである。ただし、今回の調査では、打楽器を管楽器に含むものとして考察を進める。これは、同楽団の打楽器セクションの人数が非常に少ないということと、セクション練習を行う際打楽器は管楽器と共に練習するからである。通常、プロのオーケストラ等ではチューバパートを設けたりしているが、同楽団ではチューバを使用しない楽曲を演奏することもあり得るので、専門のパートとして設けてはいない。必要になった時には外部からエキストラという形で参加してもらおう。

表4 オーケストラにおけるセクションごとの楽器構成

セクション	楽器構成	
弦楽器	ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス	
管楽器	木管楽器	フルート・オーボエ・クラリネット・ファゴット
	金管楽器	ホルン・トランペット・トロンボーン
打楽器	ティンパニー・大太鼓・小太鼓・シバル・タブラ・グロッグ・シフォン・ウット・ブロック・タムタム 等	

3) 団員構成

表5は、同志社交響楽団の団員数のパート別内訳である。2003年11月時点での総団員数は、121名（1回生33名、2回生27名、3回生30名、4回生31名）である。

表5 団員数（パート別内訳）

	1回生		2回生		3回生		4回生		合計 (人)
	男	女	男	女	男	女	男	女	
フルート	0	2(1)	1(1)	2(1)	0	2(2)	0	2(2)	9(7)
オーボエ	0	0	1(1)	2(0)	1(1)	1(0)	1(1)	1(1)	7(4)
クラリネット	1(1)	0	0	1(0)	0	2(2)	1(1)	0	5(5)
ファゴット	0	0	0	1(0)	1(0)	0	0	1(1)	3(2)
ホルン	2(2)	3(3)	0	1(0)	0	0	2(2)	1(0)	9(7)
トランペット	3(2)	0	0	1(1)	1(1)	1(0)	2(2)	1(1)	9(7)
トロンボーン	1(0)	2(2)	2(2)	0	0	1(1)	1(0)	0	7(5)

打楽器	1(0)	0	0	0	0	2(2)	1(1)	1(0)	5(3)
ヴァイオリン	5(3)	5(3)	2(1)	7(6)	2(2)	6(6)	1(1)	5(4)	33(26)
ヴァイオリン	1(1)	1(1)	1(0)	2(1)	0	3(2)	2(1)	3(2)	13(8)
チェロ	4(1)	0	1(1)	2(0)	0	5(4)	1(1)	2(2)	14(9)
コントラバス	0	2(1)	0	0	1(1)	1(1)	0	2(1)	6(4)
合計(人)	33(21)		27(17)		30(25)		31(24)		121(87)

2003年11月の時点での人数、()の中の人数は質問紙の回答者数。

4) 組織

組織構成の内容(役職等)については巻末資料を参照していただきたい。

3.2 調査用具 質問紙

1) 調査項目の作成

1.4 で述べた各質問項目が大体できあがったら、実際にその質問項目によって概念の得点化をはかれることができるかどうか事前調査をおこなった。団員数名に協力してもらい、各概念のどれにもあてはまらなかったり、質問の意図などが分かりにくかった項目については検討を重ねたり、除いたりするという作業をおこなった。

2) 下位概念の設定

概念の得点化については先ほど述べたが、ここでは得点化のためのさらに細かい概念をつくる。これを下位概念という。これらは、各質問項目の内容をグループ化したものである。表6は、質問項目(ラベル)と構成概念・下位概念との対応表である。また、質問には得点化できない質問もいくつか含まれているので、それらは「その他」として扱っている。ここでは簡略化した対応表をのせているが、実際に使用した質問紙については巻末に資料としてのせておく。

表6 質問項目(ラベル)と取り組み方の構成概念・下位概念の対応表

カテゴリ(構成概念)	問番号	質問項目(ラベル)
基本的な熱心さ・意欲 下位概念 a 練習へのコミット	問 1A	練習出席頻度 全体
	問 1B	練習出席頻度 P
	問 1C	練習出席頻度 S(学生)
	問 1D	練習出席頻度 S(トレーナー)
	問 1E	練習出席頻度 T(学生)

	問 1F 問 1G	練習出席頻度 T (トレーナー) 練習出席頻度 指揮者
下位概念 b 各練習での集中度	問 2A 問 2B 問 2C 問 2D 問 2E 問 2F	練習集中力 P 練習集中力 S 練習集中力 S (トレーナー) 練習集中力 T (学生) 練習集中力 T (トレーナー) 練習集中力 指揮者
下位概念 c 時間外練習の程度	問 4	通常練以外の練習量
*その他	問 3	練習場へ来る頻度
団の運営への関わり 下位概念 a 組織の理解	問 5 問 6	団の仕組みの理解度 役職の仕事の理解度
下位概念 b 運営そのものへのコミット	問 8 問 9 問 10	運営への積極的関わり 運営への何らかの形での関わり 演奏会スタッフへの意欲
*その他	問 7	ホームページ等の閲覧
音楽性の追求 下位概念 a 幅広い音楽性の追求	問 12 問 13 問 14 問 15 問 16	団内企画への参加 アンサンブル等への意欲 クラシック演奏会に行くか 演奏曲の勉強をするか 音楽知識の増進を望むか
下位概念 b 広い芸術性 (ハート) の追求	問 20 問 21 問 22 問 23 問 24 問 25 問 26 問 39	パート加・なければつまらないか 演奏・自分だけが満足ならいいか 観客のために演奏したいか 個人の能力向上を望むか オケのひとつになる瞬間を求めるか 個人よりも全体の芸術性を望むか 他人の解釈の受け入れるか やりがいのある曲をしたいか
*その他	問 11A 問 11B 問 11C 問 11D 問 11E 問 11F 問 11G 問 17 問 18 問 19 問 27	音楽鑑賞 (J-POP) 音楽鑑賞 (ポップス・ロック) 音楽鑑賞 (ジャズ) 音楽鑑賞 (クラブ・ダンス) 音楽鑑賞 (クラシック) 音楽鑑賞 (ワールド・ミュージック) 音楽鑑賞 (その他) クラシック CD 保有枚数 スコア保有冊数 演奏技術への自信 感情をこめるか

人間関係 下位概念 a 各関係に対する満足度	問 29A 問 29B 同回生との関係	先輩との関係
	問 29C 問 29D 問 29E 問 29F	後輩との関係 自分のパートの関係 団の人間関係 団の雰囲気
下位概念 b 各関係からの評価に対する満足度	問 30A 問 30B 問 30C 問 30D	先輩からの評価 同回生からの評価 後輩からの評価 自分のパートからの評価
下位概念 c 各関係との交流	問 32A 問 32B 問 28C	先輩との会話 同回生との会話 後輩との会話
下位概念 d 自分の影響力	問 33 問 34	自分の発言影響力 他人への影響力
*その他	問 28A 問 28B 問 28C 問 31	先輩との交流 同回生との交流 後輩との交流 打ち上げの参加
サークル活動への姿勢	問 35 問 36 問 37 問 38	サークル優先か サークルでの目標設定 サークル活動に打ち込みたい オケの意義
*その他	問 40	演奏・気分は影響するか

注) Pはパート練習、Sはセクション練習、TはTuttiのことを指す。

トレーナーとは、同志社交響楽団の練習を指導しているプロの音楽家の先生のことである。

3.3 質問紙の配布

今回の調査で特に心配であった点は、団員の皆がきちんと質問に答えてくれるだろうか、ということである。私も同楽団に所属する立場であるので、個人の属性などを詳しく聞かれた場合や普段の付き合いからは少し踏み込んだ質問内容に答えにくいだろうか、という不安である。質問紙には個人名などの一目で個人を特定できるような項目は避けたつもりであったが、そう多くはないサンプルであるため、総合して考えると特定できないこともない。団員からのそういった声があがることも十分に考えられるため、質問紙を配布する際には、できるだけ相手の団員一人一人に調査の意図や内容、回答の仕方（あまり深く考えずに、など）を口頭で説明することを心がけた。

1) 調査時期：2003年11月

2) 総団員数に対する回収率：71.9% (総団員数121名中、87名分を回収)

当初の予定よりも回収が少なくなってしまったのは、すべての団員に配布する予定だったが長期欠席していたりタイミングが合わなかったりした団員には配布することができなかったためと考えられる。

4 同志社交響楽団の実態

4.1 調査結果の得点化

この説では、調査枠組みや調査方法の項で述べた方法により、団員の取り組み方の概念について質問項目の尺度をそのまま得点化して合計点を計算するという作業をおこなう。

このとき、

概念	団の運営への関わり	の得点	=	下位概念(a+b)の得点合計
			=	問5、6、8、9、10の得点合計

というように計算する。概念、についても同様に計算する。ただし、問20、問21、問23、問39は逆転項目であるので集計の際には、得点を逆転するという作業をおこなった。

例) サンプルNo.5の人の場合

$$\text{概念の得点} = (4+4+3+3+4) = 18 \text{点}$$

ということになる。

また概念とでは欠損値が出たために単に合計して得点化することが難しくなったため、概念の平均得点×質問項目数という計算によって概念の得点を導き出すという作業をおこなった。これらの計算はSPSSソフトの[変換][計算]機能を使っておこなった。以下に概念人間関係の例を示す。MEANとは平均のことである。

例) サンプルNo.10の人の場合

$$\begin{aligned}
 \text{概念の得点} &= 15 \times \text{MEAN} (\text{問 29a}, \text{問 29b}, \text{問 29c}, \dots, \text{問 34}) \\
 &= 15 \times 4.4 \\
 &= 66 (\text{小数第一位四捨五入})
 \end{aligned}$$

4.2 箱ひげ図

それぞれの概念について得点化できたら、次に「因子を 1)セクション 2)役職の経験、従属変数をそれぞれの概念」として箱ひげ図を作成する。箱ひげ図とは、Tukey (1977) の考案した得点の偏りについての情報を提供してくれる代表的な方法である。箱の真ん中の太線は中央値である。箱の下の線は第 1 四分位 (25 パーセントイル)、上の線は第 3 四分位 (75 パーセントイル) である。つまり、これらの線で囲まれた箱の中にデータの 50% すなわち半数のデータがあり、ばらつきを表すひとつの尺度になる。

また箱ひげ図では、はずれ値 (極外値) を特別扱いする。これは、最小、最大どちらかにとび抜けた極端な値があるとその影響を強く受けることになるからである。箱から上と下に出ている線を「ひげ」という。上へ伸びたひげは、はずれ値を除いた分布の最大値との間を結んだもので、下へ伸びたひげは、はずれ値を除いた分布の最小値と間を結んだものである。中央値からのこのひげの長さを比較することによって分布の歪みを知ることができる。

4.3 考察

箱ひげ図や幹葉図の結果をもとに考察をしていく。5 つの概念すべてを見ていくのは非常に手間のかかることであるが、細かく見ていくことによってより詳しい分析ができることを期待する。

1) セクション

基本的な熱心さ・意欲

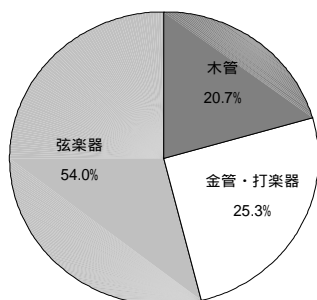


図 4 全体数に占めるセクションの割合

図 4 は、全体に占めるセクション人数の割合である。ひと目で分かるように、弦楽器が半数以上を占めている。木管楽器が 20% と少ないが、こうした人数構成の差もオーケストラの特徴のひとつであるので、考察を進める際のひとつの目安にしたい。また図 5 は、各セクション内の回生比 (%) である。この円グラフから、セク

シヨンによって回生の比率はさまざまであることが分かる。

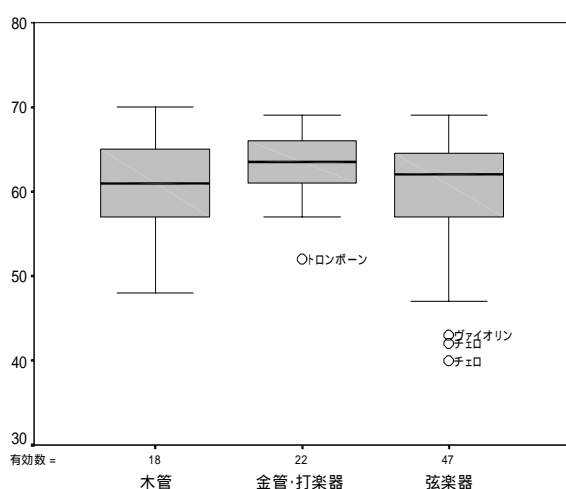
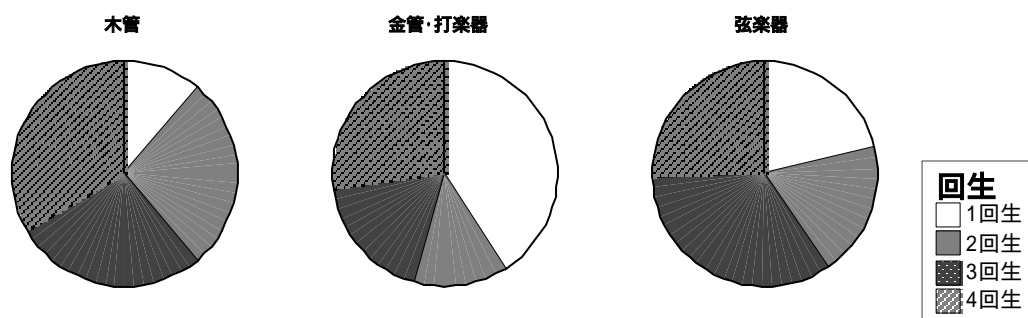


図6 基本的な熱心さ・意欲

図6の箱ひげ図を見ると、木管と弦楽器は箱の位置、ばらつきとも同じくらいである。金管・打楽器のばらつきはとても小さく、中央値は高いところに位置している。私が予想したとおり、練習への参加や態度の点数は管楽器、特に金管・打楽器が高いということが分かる。しかし、弦楽器は中央値はさほど金管・打楽器と差はないものの、ひげは値の小さな方にのびているため中央値は箱

の上の方に位置している。また弦楽器に関してははずれ値が3人おり(ヴァイオリン1人、チェロ2人)目立って低い得点が出ている。

私が考えていたほど弦楽器全体としての得点は低くなかったが、このように得点の低い方へ偏っているということから、弦楽器の意識の低さがうかがえる。図5の弦楽器の回生比を見てみると練習を中心に引っ張っていくはずの3回生の割合が一番多いはずであるのに、原因は3回生にあるとも限らないがこのような結果が出るということは少し残念なことである。それとは反対に、金管・打楽器は1回生の占める割合が大きいのにも関わらず高い得点圏に位置している。これから推測できることは金管の1回生が得点を上げている大きな要因になっているのかもしれないということでもあり、今後期待できる結果である。しかし、練習出席頻度を考える際、この質問紙に回答したのはその本人なのであるから、その人がどの程度出席しているかを判断するのはその人の感覚次第なのである。2~3回に

1回しか参加しなくても「わりと出席する」と答えている人もいるかもしれない。

団の運営への関わり

この概念においてはさほどセクションによって大差は見られない。しかし、「熱心さ」では高い位置にあった金管・打楽器は少し低い位置にあり、ひげは値の小さな方に伸びている。これには回生の影響があるといえるのかもしれない。運営面に関してまだあまり知識も関心もないであろう1回生の人数が多いほど、低い値が出やすくなるということである。

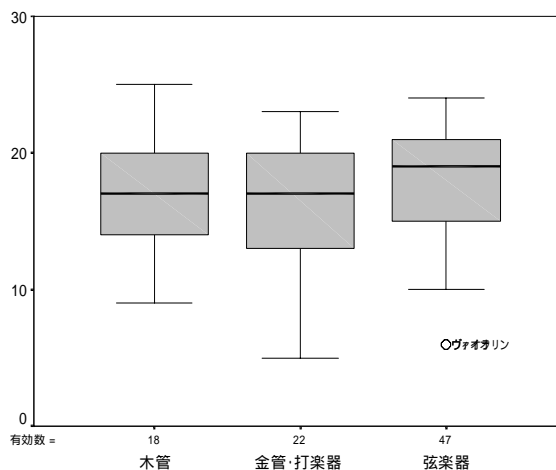


図7 団の運営への関わり

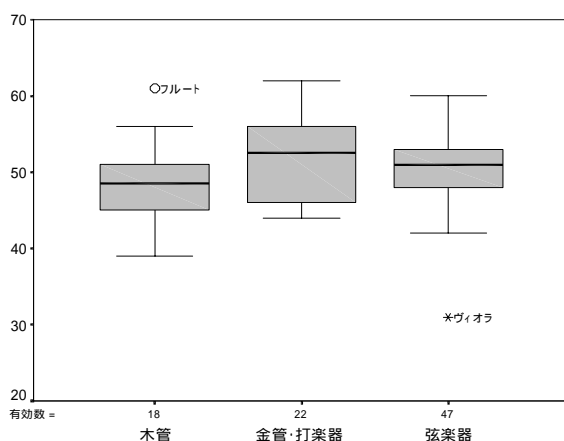


図8 音楽性の追求

音楽性の追求

なかなか面白い結果が出たといえる。セクションごとにばらつきの差が大きく違う。問15「あなたは演奏する曲の勉強をよくしますか」や問16「あなたはクラシックに関する知識を増やしたいと思いますか」といった設問によって構成されているこの概念は少し特殊といえるが、ここでも金管・打楽器の意識の高さをうかがうことができる。

驚いたのは弦楽器のばらつきの小ささである。

なぜばらつきにこのような大差が出たのであろうか。音楽性というものはある種の音楽との関わりや経験によって培われるものなのではないかと私は考える。それをこの場合、担当楽器の経験やオーケストラの経験によってみていく。

表7は「楽器経験年数とセクションのクロス表」、表8は「吹奏楽経験の有無とオーケストラ経験年数とセクションのクロス表」である。これらの表からいえることは、弦楽器は楽器経験年数が長い人が他セクションに比べると多く、同時にオーケストラ経験も長い人が多いということである。ということは楽器経験やオーケストラ経験はさほど影響しないという結果になる。今回は問わなかったが、みなそれぞれある種の音楽との関わりをも

ってきたといえるのではないだろうか。そもそもオーケストラにはそういった人間が集まるのであろう。しかし、金管楽器には吹奏楽経験者をやっていなくてオーケストラの経験年数も2年未満の人が40%もいる。これがばらつきの原因であると考えられる。

表7 楽器経験年数とセクションのクロス表

セクションの%		セクション		
		木管	金管・打楽器	弦楽器
楽器経験年数	1年未満		4.5%	6.4%
	1年以上2年未満		4.5%	4.3%
	2年以上3年未満		4.5%	12.8%
	3年以上4年未満	16.7%	13.6%	12.8%
	4年以上5年未満	5.6%		
	5年以上6年未満		13.6%	6.4%
	6年以上7年未満	16.7%	31.8%	8.5%
	7年以上8年未満	22.2%	22.7%	8.5%
	8年以上9年未満	16.7%		6.4%
	9年以上10年未満	16.7%	4.5%	4.3%
合計	10年以上	5.6%		29.8%
合計		100.0%	100.0%	100.0%

表8 吹奏楽経験とオーケストラ経験年数とセクションのクロス表

セクションの%		セクション			合計	
		木管	金管・打楽器	弦楽器		
吹奏楽経験の有無	ある	オケ経験年数				
		1年未満	7.1%	41.2%		20.0%
		1年以上2年未満	14.3%	5.9%		7.5%
		2年以上3年未満	7.1%	17.6%	22.2%	15.0%
		3年以上4年未満	50.0%	29.4%	55.6%	42.5%
		4年以上5年未満	7.1%	5.9%		5.0%
		5年以上6年未満	7.1%			2.5%
		6年以上7年未満			11.1%	2.5%
		8年以上9年未満			11.1%	2.5%
		9年以上10年未満	7.1%			2.5%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
ない	オケ経験年数	1年未満		20.0%	13.2%	12.8%
		1年以上2年未満		20.0%	10.5%	10.6%
		2年以上3年未満			18.4%	14.9%
		3年以上4年未満	25.0%		5.3%	6.4%
		5年以上6年未満			18.4%	14.9%
		6年以上7年未満	25.0%	40.0%	5.3%	10.6%
		7年以上8年未満	25.0%	20.0%	10.5%	12.8%
		8年以上9年未満			7.9%	6.4%
		9年以上10年未満	25.0%		7.9%	8.5%
		合計		100.0%	100.0%	100.0%

「知識・情報豊富な金管・打楽器群」

以下の表にとっても興味深い結果が出ている。表9はクラシック鑑賞についてのクロス表で

ある。弦楽器と木管は割合が大体同じくらいであるのに対して、金管・打楽器は「よく聴く」と答えた人が6割もいることが分かる。私は普段から、金管楽器の人の知識の豊富さに感心することが多いが、これらの結果からもそれはよく分かる。金管・打楽器に限らずクラシック音楽を聴くか聴かないかはまったくの個人の自由であるが、同志社交響楽団の8割以上の人は普段からクラシック音楽を聴いているということである。普段の生活にクラシックが深く根付いているということであろうか。

表9 問11 E 「あなたは次のジャンルの音楽をどのくらい聴きますか(クラシック)」

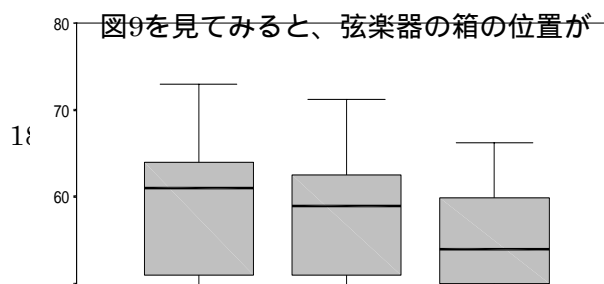
		音楽鑑賞(クラシック)					合計
		聴かない	あまり聴かない	どちらとも いえない	ときどき聴く	よく聴く	
木管	度数	1	2	1	6	8	18
	セクションの%	5.6%	11.1%	5.6%	33.3%	44.4%	100.0%
金管・打楽器	度数		2		6	14	22
	セクションの%		9.1%		27.3%	63.6%	100.0%
弦楽器	度数		6	3	17	21	47
	セクションの%		12.8%	6.4%	36.2%	44.7%	100.0%
合計	度数	1	10	4	29	43	87
	セクションの%	1.1%	11.5%	4.6%	33.3%	49.4%	100.0%

しかし、表10を見ると意外にも団員のクラシックCD枚数は少ないことが分かる。これは非常に残念な結果である。特に、弦楽器は人数も多いのに、管楽器に比べると圧倒的に所有枚数の多い人は少ない。よく考えてみるとたしかに管楽器の人は弦楽器の人よりも曲名やオーケストラ、指揮者について詳しいと感じた経験がある。管楽器には追求心の高い人が多く、「凝る」人が多いのかもしれない。

表10 問17 「あなたのクラシックCD保有枚数はどのくらいですか」

		クラシックCD保有枚数					合計
		10枚未満	10～29枚	30～49枚	50～99枚	100枚以上	
木管	度数	3	8	3		4	18
	セクションの%	16.7%	44.4%	16.7%		22.2%	100.0%
金管・打楽器	度数	5	7	1	1	8	22
	セクションの%	22.7%	31.8%	4.5%	4.5%	36.4%	100.0%
弦楽器	度数	12	13	12	4	6	47
	セクションの%	25.5%	27.7%	25.5%	8.5%	12.8%	100.0%
合計	度数	20	28	16	5	18	87
	セクションの%	23.0%	32.2%	18.4%	5.7%	20.7%	100.0%

人間関係



少し低く、ひげも下に伸びている。弦楽器の人は人間関係に対して満足していない人が多いということである。木管・金管・打楽器は、中央値が箱の上によっているので、わりと高い得点圏に25パートの人がひしめき合っているということである。

普段からセクションでの交流が多く、私の印象としても人数が少ないだけに仲もよくまとまりがある、といったイメージの木管楽器はやはり満足度が高い人が多い。

図9 人間関係 なぜ弦楽器は満足度が低いのであろうか。「パート内の関係」に焦点を絞って考えてみる。表11、表12をみると、どちらの表も弦楽器は「どちらともいえない」と答えている人が多数いることが分かった。得点の計算ではこの「どちらともいえない」を3点として計算しているために弦楽器全体の得点は低くなってしまったと考えられる。「どちらともいえない」という尺度の解釈は非常に難しい。単に何にも思わないだけなのか、無関心なのか。関係に対してさほど興味がないうという結果なのかもしれない。また、弦楽器の人数の多さも重要な一因であるのではないだろうか。人間関係というものは、その集団内の人数が多ければ多いほど複雑であり、個々の考えも多岐に渡る。そのようななんともいい難い複雑な胸中の表れのような気がしてならない。

表 11 問 29D 「あなたは次の事柄に関してどの程度満足していますか（自分のパート）」

		自分のパートの関係				合計	
		不満である	どちらかといえ ば不満である	どちらとも いえない	どちらかといえ ば満足している		満足している
木管	度数		2	3	6	7	18
	セクションの%		11.1%	16.7%	33.3%	38.9%	100.0%
金管・打楽器	度数		3	2	8	9	22
	セクションの%		13.6%	9.1%	36.4%	40.9%	100.0%
弦楽器	度数	1	2	12	17	15	47
	セクションの%	2.1%	4.3%	25.5%	36.2%	31.9%	100.0%
合計	度数	1	7	17	31	31	87
	セクションの%	1.1%	8.0%	19.5%	35.6%	35.6%	100.0%

表 12 問 30D 「あなたは次の相手からの評価に対してどの程度満足していますか（自分のパート）」

		自分のパートからの評価				合計
		どちらかといえ ば不満である	どちらとも いえない	どちらかといえ ば満足している	満足している	
木管	度数		6	5	7	18
	セクションの%		33.3%	27.8%	38.9%	100.0%
金管・打楽器	度数	1	5	9	6	21
	セクションの%	4.8%	23.8%	42.9%	28.6%	100.0%
弦楽器	度数	3	26	15	2	46
	セクションの%	6.5%	56.5%	32.6%	4.3%	100.0%
合計	度数	4	37	29	15	85
	セクションの%	4.7%	43.5%	34.1%	17.6%	100.0%

サークル活動への姿勢

弦は下の方へ少し偏っているが箱の位置は木管とさほど変わりはない。金管・打楽器はばらつきも小さく、中央値も高い。金管には学生生活において「サークル活動を重視しているという熱心な人が多いようである。

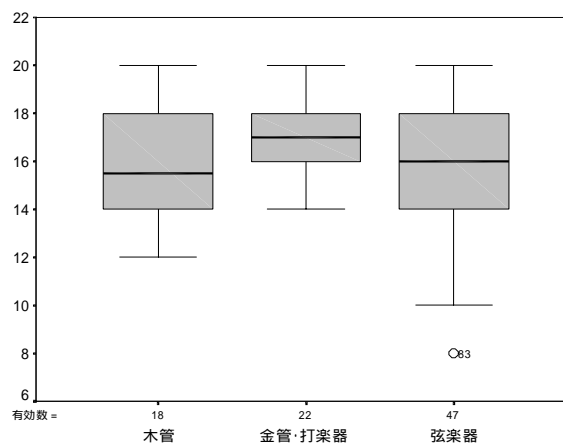


図10 サークル活動への姿勢

～ まとめ

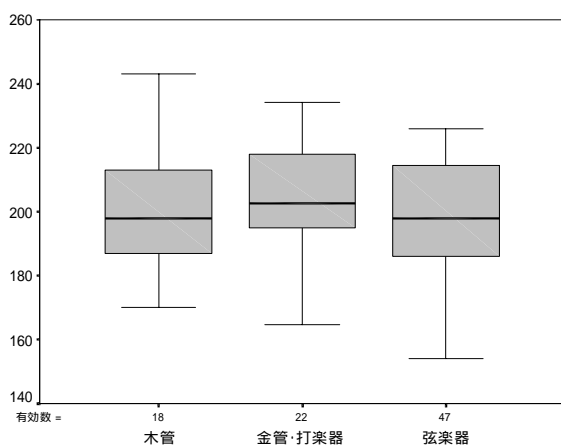


図11 ～ 概念合計得点

図11は、～ の概念の合計得点である。合計では、概念ごとに無難な位置にいた木管が箱の位置は低いが高得点圏に偏っている。弦楽器はやはり下に偏りが出ている。これまでの結果を総合すると、やはりセッションごとに意識の差はあるということが分かった。どの概念においても弦楽器が一番低い位置にいたので、「弦楽器の人の取り組みに対する意識は、管楽器の人よりも低い」という仮説はある程度証明されたといえる。

また3つのセッションに分けて考察した結果分かった事は、金管・打楽器の意識の高さである。私の1回生の頃からの金管楽器の人に対するイメージは「アツイ」人が多いということである。団内の数あるイベントに対し、非常に積極的に取り組んでいる姿をよく目にしてきた。少し表現しにくいだが、何か特別な“男クサさ”を感じるのである。男性に特有の勢いのようなものや追求心を感じることもある。実際、同志社交響楽団の金管パートは男性が半数以上を占めている。金管楽器というのは、オーケストラにおいてその音量の大き

さや和音（ハーモニー）伴奏機能に仕事の重点を置かれることが多く、弦楽器や木管楽器に比べるとトロンボーンやトランペットにおいてはさほどメロディがあるわけでもなく演奏頻度も限られてくる。一見それではつまらないのではないかと、思うこともあるがこれらの結果から、逆に金管・打楽器の人たちのオーケストラにおける取り組みの幅の広さを感じることができる。

次のような話がある。

ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界」の最終第4楽章には特に目立つわけではない（多くの人が聞き逃してもおかしくはない）いわば隠し味的なシンバルの一打がある。ある有名オーケストラは演奏の際、その一打のためだけの奏者を用意した。彼はその一瞬の“大役”のために演奏会に出たのである。しかし1楽章～4楽章までの約30分ほどの出番までの待ち時間を経て、やっと出番が来たその時どうしたことかその奏者の手は動かなかっらしい。つまり、彼の手を持ったシンバルは音を一音も発することなくコンサートは終了してしまっただけである。

このような一打のみの演奏というのはあまりないが、管・打楽器にはこのようなことは“起こり得る”ことなのである。それだけに数少ない出番に対する意気込みは違ってくるのであろう。表13を見てみると、金管・打楽器の「感情をこめる」割合は「どちらかといえばそう思う」「そう思う」が9割を占めている。出番は少ないが、その分の気持ちの入れ方が大きいという表れであろうか。演奏中「出番が少なくてヒマ」と思う一方、音に込める感情は深いということである。そう考えると私は少し管楽器の人について誤解をしていたのかもしれない。また、サークルという組織におけるパートやセクションの雰囲気・特性の世襲性のようなものも関係しているのではないだろうか、と考える。私が1回生の頃から各パート・セクションの人に対して抱いているイメージは3年経った今でもさほど変わってはいない。その年ごとのさまざまな物理的要因による影響は受けるであろうが、いわゆる知らず知らずのうちに受け継がれている、良くも悪くも“伝統”のようなものを感じることができるからだ。

表 11 問 27「あなたは自分の感情を演奏に込めますか」

		感情をこめる				合計	
		そう思わない	どちらかといえ ばそう思わない	どちらとも いえない	どちらかとい えばそう思う		そう思う
木管	度数	1		5	6	6	18
	セクションの%	5.6%		27.8%	33.3%	33.3%	100.0%
金管・打楽器	度数		1	1	11	9	22
	セクションの%		4.5%	4.5%	50.0%	40.9%	100.0%
弦楽器	度数	1		9	20	16	46
	セクションの%	2.2%		19.6%	43.5%	34.8%	100.0%
合計	度数	2	1	15	37	31	86
	セクションの%	2.3%	1.2%	17.4%	43.0%	36.0%	100.0%

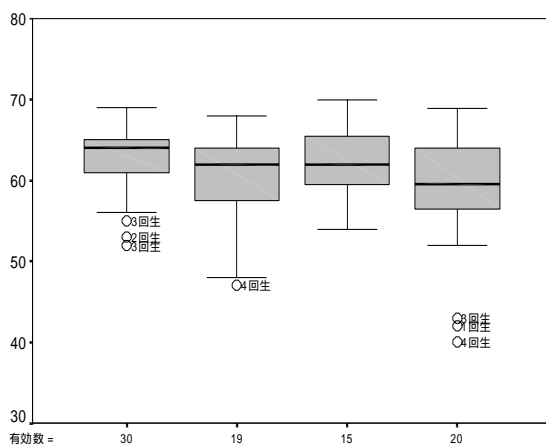
木管は人数的にもこじんまりとしているが、オーケストラにおいては多くのメロディ部分を担当する花形楽器が多い。そのようなオーケストラにおける役割から、木管の人は、独立意識が強く個人を優先するのではないかと考えてきた。しかし表14をみると、個人技術の追求だけに偏らず、全体の調和を求めようとするそのような人間が多いのではないだろうか。独立した自分を持ちながらも、全体に上手く融合できるというのが木管の人たちなのかもしれない。

表 14 問 25 「各々の技術よりも全体の芸術性を求めますか。」

		個人よりも全体の芸術性				合計	
		そう思わない	どちらかといえ ばそう思わない	どちらとも いえない	どちらかとい えばそう思う		そう思う
木管	度数			6	10	2	18
	セクションの%			33.3%	55.6%	11.1%	100.0%
金管・打楽器	度数	1	1	9	6	5	22
	セクションの%	4.5%	4.5%	40.9%	27.3%	22.7%	100.0%
弦楽器	度数		1	15	21	10	47
	セクションの%		2.1%	31.9%	44.7%	21.3%	100.0%
合計	度数	1	2	30	37	17	87
	セクションの%	1.1%	2.3%	34.5%	42.5%	19.5%	100.0%

2) 役職

基本的な熱心さ・意欲



22

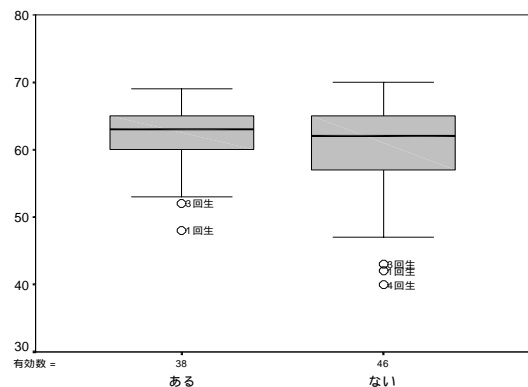


図 13 基本的な熱心さ・意欲×技術系経験

図 12 基本的な熱心さ・意欲×役職経験

やはり、「現在何らかの役職に就いている」の箱はばらつきも小さく、位置も他に比べて少しだけ上である。今のところ何にも「あてはまらない」と答えた人はばらつきがあり、中央値も箱の下の方に位置しており、はずれ値が3人いる。このはずれ値は大変低いものであるので、こういったところに役職経験の差が出ているといえるかもしれない。意外な結果であったのは、「就いたことのある」が、「今後就く予定」よりも低い意識であるということである。

表15を見て分かるように「就いたことのある」という人の9割は4回生である。その他の役職経験に関しても、「現在就いている」という人の7割は3回生で、「今後就く予定」という人の6割は2回生、「どれにもあてはまらない」という人の7割は1回生である。つまりは、役職経験による区別 = 回生による区別、と考えてもさほど見解に相違は出ないであろう。たくさんのことを経験してきたはずのベテラン勢は、3回生での役目を終えた途端にやる気が低下してしまうということの表れであろうか。たしかに3回生での役目を終えてから半年ほどの間に、4回生は就職活動などという人生における重大な岐路に立つ。しばらくの間サークルから離れる人もいれば、上手く両立を続ける人、そのまま戻ってこない人もいたりするのが実状である。半年ほどの間にさまざまな環境変化によって4回生の練習に対するモチベーションの変化がもたらされるのであろう。

表 15 回生と役職経験のクロス表

		役職の有無			合計	
		現在就いている	就いたことがある	今後就く予定		どれにもあてはまらない
1回生	度数		1	6	14	21
	役職の有無の%		5.0%	37.5%	70.0%	24.4%
2回生	度数	6		10	1	17
	役職の有無の%	20.0%		62.5%	5.0%	19.8%
3回生	度数	21	1		2	24
	役職の有無の%	70.0%	5.0%		10.0%	27.9%
4回生	度数	3	18		3	24
	役職の有無の%	10.0%	90.0%		15.0%	27.9%
合計	度数	30	20	16	20	86
	役職の有無の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

図13を見ると、やはり技術系に就いたことのある人の得点は高い位置に集中している。「何らかの重要な役職に就いている(就いたことのある)人は、取り組みへの意識が高い。それが特に練習参加というカテゴリーに絞った場合、技術系への関わりが深い人ほど意識が高い。」という私の仮説は一応立証されたといえる。

団の運営への関わり

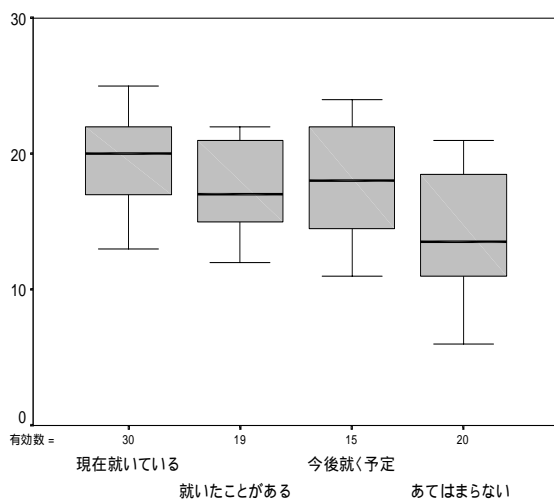


図 14 団の運営への関わり × 役職経験

この概念で知りたかったのは、基本的な練習以外の実務面などにおける団との関わりについてである。やはり、何の役職にも就いていない(就く予定もない)人は、運営に関する興味もさほどないといえる。これはこの中心が1回生回であるからであろう。まだ団に所属して1年も経っていないので、団の仕組みはもちろん役職について詳しく知るはずがないのである。しかしここでも「就いたことのある」は少し低い位置にある。4回と生になるとそれほどまでに意識の変化が起こるのであろうか。来年以降もこの調査を続けるのであれば、時系列的に意

識の変化を測ることが可能であるので、面白い結果が出るかもしれない。

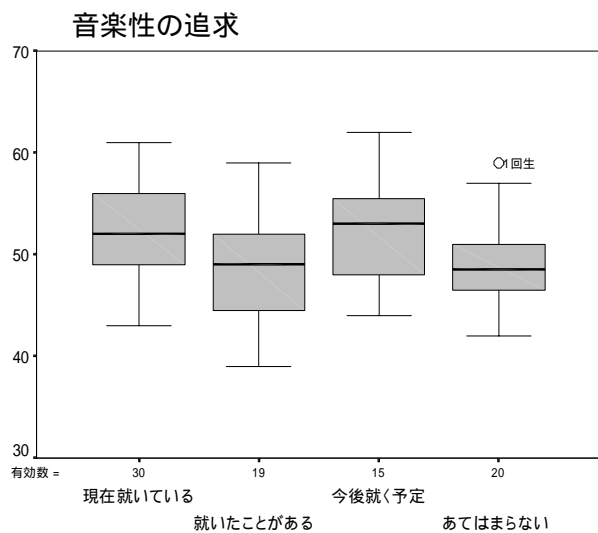


図15 音楽性の追求 × 役職経験

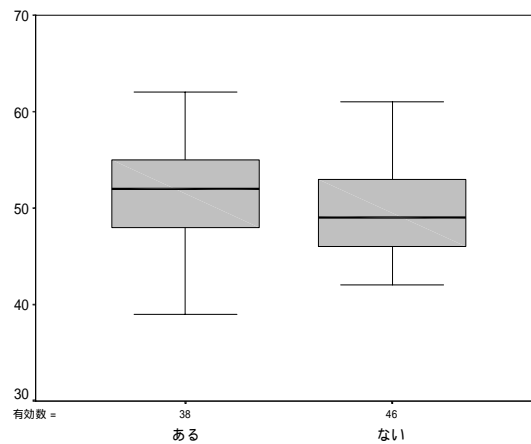


図16 音楽性の追求 × 技術系経験

図15を見ると、「役職に就いている」「就く予定」が同じような結果になっている。ここでもやはり「就いたことのある」は低い位置にきている。

図16を見ると、技術系の経験者（これから就く予定者）の意識は高い。ばらつきは経験のない人に比べると大きいですが、予想どおりの結果である。この概念では音楽に対する幅広い積極性を問う設問が多数存在しているので、団員の練習を見るという立場にいる技術系は自然にその意識が高くなることは必然的なのである。しかし同時にその中でもばらつきはあるということも分かった。「就いたことがある」と答えた人がこの概念において目立って低いということはやはり執行回生とそうでない時の意識の差が大きいということであろう。しかも、前節で述べたように、金管・打楽器の意識は高いということを前提として考えると、木管・弦楽器の4回生の内の役職経験者の意識が低いということがいえるかもしれない。

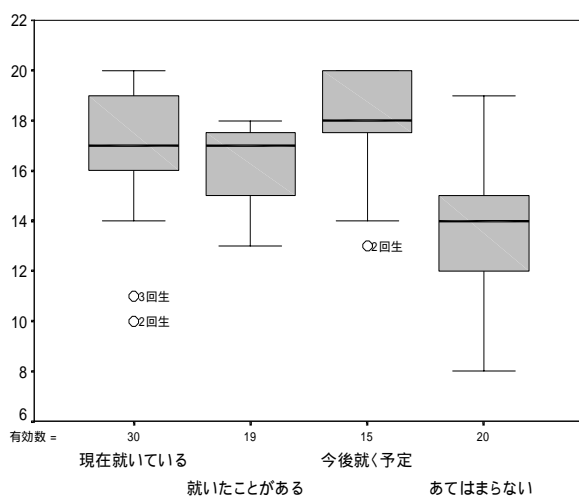
人間関係

人間関係は、企業ならばともかく同楽団ないにおいては役職とはさほど関係してくるとは考えにくいいため細かな考察は控えておく。

サークル活動への姿勢

「今後就く予定」と答えた人の点数がかなり高いということが分かる。これはつまり2回生のサークル活動に対する姿勢の得点が高いということである。たしかに、今の2回生はサー

クル活動に対して前向きな考えを持っている人が多いように思う。



この概念は、変な言い方をすると、「サークルへののめり込み」みたいなものを表していると考えてもらってよい。そうすると「あてはまらない」と答えた（つまり多くが1回生であるが）人がまだまだのめり込んでいないという考えができる。

図 17 サークル活動への姿勢 × 役職経験

～ まとめ

「役割意識の移動の意味」

役職に関する考察をまとめると、「何らかの重要な役職に就いている（就いたことのある）人は、取り組みへの意識が高い。」という私の仮説は半分正しかったといえる。ではなぜ半分なのか。総合して順位をつけるとするならば、「現在就いている > 今後就く予定 > 就いたことがある > 就いたこと（就く予定）がない」という構図が成り立つ。一度は役職に就いたことがあっても、その役職から離れるとまた取り組みへの意欲は下がるという結果が出たからである。細かくいえばこのような結果なのであるが、大まかにいえばつまり、何らかの役職に就いている人といない人之间には温度差があるということである。つまりは回生による温度差があると言い換えることができる。私はこれまで「執行回生になったから今年は去年よりがんばる」「執行から解放されたから楽」という考えをよく聞いてきたし、自分自身でもそのような考えをしたことは何度でもある。誰にでもあることであると思うが、自分が中心にならなくてはいけない時は意識が高揚するものである。そして4回生に見られるように、自分の出番が終わると同時にその高まりも冷めていくという現象が起こるのである。

こういったことが起こるのは、学生生活という限られた時間内においてその所属する組織における役割が順番に巡っていくというサークル組織の特徴が原因である。何にも考え

ていなかった1回生、執行回生への意識をし始める2回生、中心になって無我夢中の3回生、役割意識から解放され落ち着く4回生、といった感じであろうか。大学におけるサークルというのは毎年メンバーが入れ替わる。しかし同志社交響楽団ではこのような構図は毎年同じなのではないかと思う。楽器による影響を除いて考えると、回生の変化は役割意識の移動を意味し、同時に取り組みに対する意識の変化をもたらすのである。

3) その他

ここでは、その他の項目として面白い結果が出たものについて考察していきたい。表16は、問40「あなたは自分の気持ちや精神状態がどの程度演奏に影響しますか」という設問とセクションとのクロス表である。木管を見てみると「わりと影響する」「すごく影響する」と答えた人が94%もいる。他セクションも高い割合が出ているが、木管の割合の高さに驚いた。木管にはナイーブな人が多いのだろうか。オーケストラにおいて木管奏者には非常に高度な技術やソロを求められることが多い。だとすればこの結果はあまり良くないのかもしれない。しかし、それだからこそ逆にバリエーションに富んだ演奏ができるのかもしれない。気分が演奏に影響するということは、そのまま音に表れるということである。楽器という媒体を通して、音楽は常に人間の内面と関わりながら動いている。自分の感情が、楽器の持つ元々の力と混ざり合い変化して音になるのである。

表 16 問 40 「あなたは自分の気持ちや気分がどの程度演奏に影響しますか」

		演奏・気分の影響				合計	
		影響しない	あまり影響しない	どちらともいえない	わりと影響する		すごく影響する
木管	度数		1		9	8	18
	セクションの%		5.6%		50.0%	44.4%	100.0%
金管・打楽器	度数	1	3	4	5	9	22
	セクションの%	4.5%	13.6%	18.2%	22.7%	40.9%	100.0%
弦楽器	度数	1	6	4	16	19	46
	セクションの%	2.2%	13.0%	8.7%	34.8%	41.3%	100.0%
合計	度数	2	10	8	30	36	86
	セクションの%	2.3%	11.6%	9.3%	34.9%	41.9%	100.0%

5 おわりに

セクションや役割に焦点を絞って考察してきたが、私にとって仮説どおりの結果が顕著に出なかったことは逆に非常に嬉しいことであった。弦楽器の人の意識の低さは私が予想

していたよりも大分低かった。私が普段感じている差は表面上のものであって、皆、内面ではオーケストラに対する熱意はそれなりに秘めていたのである。

「オーケストラはひとつの社会の縮図」(茂木 2000)であるという。パートという社会、セクションという社会、回生という社会。ばらつきが多かったりしたのは、その社会にさまざまなタイプの間があるからなのである。一人一人の目指すところは多種多様なのである。「オーケストラは大人数でひとつの音楽をつくりあげているようだが、内部はばらばら」という私が冒頭でも述べた違和感はそこから生まれているのである。それぞれの社会には、さまざまな人間がいてそこに関係が生まれる。人数が多ければ多いほど個人の本当の姿が隠れてしまう。集団に埋もれるとはこういうことなのかもしれない。しかもその姿は、回生が変わるごとに意識変化が起こるように時間の経過と共に変化していく。しかしそのようなヴェールに包まれた状態であるからこそ、ヴァイオリンからもヴィオラからもチェロからも...私たちの楽器からはより深みのある何層にも重なった音が出るのであると私は考える。

では、私たちは音楽、楽器という武器を媒介にして個人を表現しているのだろうか。米国の有名なヴァイオリニスト、メニューヒンは次のように述べている。「ベートーヴェンは、オーケストラを使って個人・の力を音楽の中に表現するという新しい方法を見つけたのである」(Menuhin 1983)。ベートーヴェンが生きた時代はまさにフランス革命の時代である。それは人間が自由で平等な存在とされ始めた時代である。人間的な感情を音楽に盛り込むことはそれまでの音楽にはなかったことである。ベートーヴェンは旋律によってつくられる主題やリズムや和声によって、人間の感情などを表現したのである。音楽は単なる理論の結果ではなく、人間の自由を表現する働きを持っている“音の言葉”なのである。私たちオーケストラにおける楽器奏者は、楽器をとおして言葉を発するのである。たとえその音楽が他人のつくったものであったとしても、その流れる音楽のどこかで私たちは旋律やリズムなどと自分の思いと置き換え、楽譜に書かれていないこと、つまりは個人を表現しているのではないだろうか。指揮者や仲間とともに作りあげる統一された音楽性の中に個人が存在しているのだ。

こういったサークルに関するテーマを取り上げようと決めた時、どのようにしてデータを集め考察していこうか非常に悩んだ。団員に協力してもらい質問紙調査をすることは簡単ではあるが、よく考えてみると非常に難しいことなのである。皆が果たしてどこまで正直に答えてくれるのか、ということが一番の心配の種であった。また、意識行動を簡単にデ

ータ化し、点数化することに本当に意味があるのか疑問に思うこともあった。しかし実際に調査を進めていくと、やはり文字やデータにして初めて気付くことがたくさんあった。今回の結果は一度限りのものでありサークルは今後もそれなりに変化していくことは当たり前のことなのであるが、どうか今後もオーケストラにおける“自分”の存在を認識し個人の表現を楽しんでもらいたいし、私自身もまたそのように考えながらオーケストラを続けていきたい。

(40×30、29ページ)

400字詰め原稿用紙 87枚

[参考文献]

- 同志社交響楽団 OB 会，1995，『同志社交響楽団 70 年誌』
- 近藤滋郎，1998，『アマチュア・オーケストラ入門』音楽之友社．
- 宮脇典彦・阪井和男・和田悟，2000，『SPSSによるデータ解析の基礎』培風館．
- 茂木大輔，2000，『オーケストラ楽器別人間学』新潮社．
- ，2001，『オーケストラ人間的楽器学 上巻』ヤマハミュージックメディア．
- ，2001，『オーケストラ人間的楽器学 下巻』ヤマハミュージックメディア．
- 盛岡清志編，1998，『ガイドブック社会調査』日本評論社．
- 盛山和夫・近藤博之・岩永雅也，1992，『社会調査法』放送大学教育振興会．
- 西岡信雄，2000，『楽器からのメッセージ 音と楽器の人類学』音楽之友社．
- 野本由紀夫，2003，『はじめてのオーケストラ・スコア スコアの読み方ハンドブック』音楽之友社．
- 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・水野武，1999，『社会調査へのアプローチ 論理と方法』ミネルヴァ書房．
- Posell, Elza Z., 1973, *This is an orchestra*, U.S.A: Houghton Mifflin Company (= 1984 , 荒谷俊二訳 『これがオーケストラだ』音楽之友社)
- 新村秀一，1994，『SPSS for Windows入門』丸善．
- 辻栄二，1990，『アマチュアの領分: ヴァイオリン習得術』春秋社．
- Menuhin, Yehudi and Davis, Curtis W., 1979, *The Music of Man*, Canada: Methuen Publication. (= 1983 , 別宮貞徳訳 『メニューヒンが語る人間と音楽』日本放送出版協会)

[参考URL]

<http://www.geocities.co.jp/MusicHall/5502/left.html>

	役職	仕事内容
	幹事長	楽団の最高責任者であり、楽団全体を把握し、事務を総理する。
技術系	コンサートマスター	1stVn 首席奏者。演奏面での最高責任者。
	セクションリーダー	各セクションの技術面での責任者。まとめ役。
	パートトップ	弦楽器のパートにおける技術的責任者。
	パートマスター	各パートの責任者、まとめ役。団の楽器管理責任者。
	ライブラリアン	楽譜、テープ、CD の管理、調達を行う。
実務	チーフマネージャー	マネジメントの総括責任者。渉外のチーフ。

<http://www.doshisha.ac.jp/zaigaku/kagai/kounin.html>

	渉外	金銭の出納を取り扱う。
	合宿マネージャー	合宿全般におけるマネジメントの責任者。
	同立交歓委員	立教大学交響楽団との連絡を担当、同立交歓演奏会の企画等を行う。
団内実務系	インスペクター	団内実務系の責任者。
	庶務	主に団内実務を取り扱い、団員の意見吸収を行う。
	広報	団の活動を団外に情宣し、団内における配布物の作成、配布を行う。
	書記	様々な形態のミーティングの中で得られた事を書き留め、記録し、これの保管に責任を負う。
学内実務系	メサイア委員	全同志社メサイア演奏会実行委員となり、他の団体との連絡を担当、演奏会の企画等を行う。
	別館委員	新町・田辺別館の運営に関する同響の責任者。

資料) 同志社交響楽団における役職

(「2003年度 同志社交響楽団規約」より作成)

資料) 同志社交響楽団の練習形態

(「2003年度 同志社交響楽団規約」より作成)

資料) 楽器別能力一覧表

	高音域	低音域	<i>ff</i>	<i>pp</i>	メロディ	伴奏	運動能力	演奏頻度
フルート	4	0.5	2.5	4	4	1	4.5	3.5
オーボエ	3.5	1	3	2	4	0.5	2.5	4
クラリネット	3.5	3	3	5.5	4	3	4	3
ファゴット	2	4.2	2	3	2	4	2.5	3
ホルン	2	4	5	4	2.5	4	2	3.5
トランペット	3	2	4.5	2.5	2.2	2	2	2
トロンボーン	1.5	4.2	4.5	3	1	3	1	1
打楽器	5	5	5	2	0.1	1	1	0.5
ティンパニ	0.5	4	4	3	0.5	1	1	1.5
第1ヴァイオリン	5	2	4	4.5	5	4	5	5
第2ヴァイオリン	4	2	3.5	4.5	3.5	4.5	4	5
ヴァイオラ	3	3	3	4	2	5	3	4
チェロ	2.5	4	3.5	4	3	4	3	4
コントラバス	1	5	2	4	1	5	2	3.8

[解説]

・フルート

圧倒的にメロディの楽器。演奏頻度は木管では高い方だが、弦には負ける。運動能力は高く、管楽器においては最高。上回るのは第1ヴァイオリンのみ。

・オーボエ

音域は狭い。PPは不得意。メロディに偏る。演奏頻度は、他の木管とほぼ同じ程度。

・クラリネット

多様性、万能性を持つ楽器。PPが最も得意な楽器。メロディも多いが、伴奏にまわることも

パート練習 音程やリズムをはじめとする基本的な事を性格に理解し、楽譜に忠実に演奏できるようにする事を目標とする。

セクション練習 音色やアーティキュレーションを統一し、和音や音量バランスの調整をおこなう。各セクションがまとまって演奏できる事を目標とし、個人管理、パート練習の課題を示すためのもの。また、他パートとの関連を把握する事で、曲の中での自分の役割を理解する。

合奏 (Tutti) 各自の解釈(テンポ、リズム、フレーズ等)を統一し、全体の和音、音量バランスの調整をおこなう。また他声部との関連を把握する事で曲全体の一貫性、音楽性を追求する事を目標とする。

多い。運動能力は非常に高い。演奏頻度は標準。

・ファゴット

低音楽器。音の弱い楽器。メロディはあまりない。運動能力は以外に高い。

・ホルン

2、4番ホルンは時に非常に低い低音での仕事をこなす。ffは相当に出る。PPも他の金管楽器よりは達者である。伴奏や内声の機能はオーケストラの中でも最大。演奏頻度は非常に高い。

・トランペット

PPに苦しむ楽器。ことに2番トランペットには鬼門が多い。ffは圧巻。ホルンよりメロディは少なめ。運動能力は高いがそれほど要求されない。

・トロンボーン

低音楽器。ffは物凄い。メロディはほとんど限られており、また伴奏がさほどあるわけでもなく、コラール、ファンファーレが結果的にメロディに聞こえたりする。運動として要求されるのは、バランス感覚、音色、ダイナミクスなど。演奏頻度は少ない。

・打楽器

シンバルはオーケストラの中で最も高い音を出す楽器。PPは楽器によっては非常に難しい。メロディは基本的になし。

・ティンパニ

非常に重要な機能で、オーケストラの中ではかなり独立した機能。しかし、どちらかといえば伴奏。叩く場面は他の管楽器に比べれば少ない。

・第1ヴァイオリン

高音は無限に広いと言えるが、低音にははっきりと限界がある。ffもPPも無限に出る。たいていいつもメロディを弾いている。運動能力、演奏頻度とも最大。なんといってもオーケストラの主役。

・第2ヴァイオリン

演奏頻度は第1ヴァイオリンと等しいが、運動能力では第1ヴァイオリンの方が細かいテクニックを要求される。

・ヴィオラ

音の張りは少し減る。いつも大体伴奏をやっている。演奏頻度は高い。

・チェロ

音域によってはffも相当出る。メロディは結構多い。出演頻度は高い。運動は比較的不得意。

・コントラバス

低音楽器。ffは頑張ってもさほど出ない。裏方に徹していると言える。ティンパニよりはメロディ多い。

(茂木大輔『オーケストラ楽器別人間学』より作成)

資料) 質問表

F 1 . 性別

1 . 男性	2 . 女性
--------	--------

F 2 . 回生

() 回生

F 3 . 大学

1 . 同志社大学	2 . 同志社女子大学	3 . その他 () 大学
-----------	-------------	----------------

F 4 . 在籍学科

1 . 文学・社会学	2 . 芸術	3 . 教育学
4 . 法学	5 . 経済学・商学・経営学	6 . 理学
7 . 工学	8 . 農学	9 . 医学
10 . その他 ()		

F 5 . 担当楽器 (1 つだけ選んでください)

1 . フルート	2 . オーボエ	3 . クラリネット
4 . ファゴット	5 . ホルン	6 . トランペット
7 . トロンボーン	8 . 打楽器	9 . ヴァイオリン
10 . ヴィオラ	11 . チェロ	12 . コントラバス

F 6 . 担当楽器経験年数

約 () 年 () ヶ月

F 7 . オーケストラ経験年数

約 () 年 () ヶ月

F 8 - 1 . 吹奏楽経験の有無

1 . ある 2 . ない

F 8 - 1 で 1 (ある) と答えた方のみ記入して下さい。

F 8 - 2 . 吹奏楽経験年数

約 () 年 () ヶ月

F 8 - 3 . 吹奏楽における担当楽器

1 . 現在と同じ 2 . 現在とは違う楽器 ()

F 9 - 1 . 役職

1 . 現在就いている 2 . 就いたことがある 3 . 今後就く予定
4 . どれにもあてはまらない

F 9 - 1 で 1 ~ 3 と答えた方のみ記入して下さい。

F 9 - 2 . その役職は何ですか。 あてはまるもの全て を選んでください。

1 . 団内実務系 2 . 団外実務系 3 . 学内実務系
4 . 技術系 (パートマスター含む) 5 . その他 ()

F 10 . 住まい

1 . 自宅生 2 . 下宿生

【問 1】あなたは次の練習にどのくらいの頻度で出席していますか。

	出席 しない	あまり 出席 しない	どちら とも いえ ない	わり と 出席 する	か な ら ず 出席 する
A 練習全体	1	2	3	4	5
B パート練習	1	2	3	4	5
C セクション練習 (学生指揮)	1	2	3	4	5
D セクション練習 (トレーナー)	1	2	3	4	5
E Tutti (学生指揮)	1	2	3	4	5
F Tutti (トレーナー)	1	2	3	4	5
G 指揮者御来団	1	2	3	4	5

【問2】あなたの次の練習形態での集中力はどのくらいですか。

	集中しない	あまり集中しない	どちらとも いえない	わりと集中する	すごく集中する
A パート練習	1	2	3	4	5
B セクション練習（学生指揮）	1	2	3	4	5
C セクション練習（トレーナー）	1	2	3	4	5
D Tutti（学生指揮）	1	2	3	4	5
E Tutti（トレーナー）	1	2	3	4	5
F 指揮者御来団	1	2	3	4	5

【問3】通常練習を含めて、あなたの練習場へ来る頻度はどのくらいですか。

1. あまり来ない	2. 週に2～3日	3. 週に4～5日	4. ほぼ毎日
-----------	-----------	-----------	---------

【問4】あなたは通常練習以外にどのくらい練習しますか。

1. しない	2. あまりしない	3. どちらともいえぬ
4. まあまあ練習する	5. かなり練習する	

	そう 思わない	どちらか といえぬ と思う	どちらとも いえぬ	どちらか といえぬ と思う	そう 思う
【問5】あなたは団の組織の仕組みを理解している と思いますか。	1	2	3	4	5
【問6】あなたは団の各役職の仕事内容を理解して いると思いますか。	1	2	3	4	5

【問7】あなたは団のホームページ等広報に関わるものなどをチェックしますか。

1. あまりしない	2. 月に1～2回	3. 週に1回ほど
4. 週に2～3回	5. ほぼ毎日	

	そう 思わない	どちらか といえぬ と思う	どちらとも いえぬ	どちらか といえぬ と思う	そう 思う

【問 8】あなたは団の運営に積極的に関わりたいと思いますか。

1 2 3 4 5

【問 9】あなたは団の運営に何らかの形で少しでも関わりたいと思いますか。

1 2 3 4 5

【問 10】あなたは演奏会のスタッフ等を進んでやりたいと思いますか。

1 2 3 4 5

【問 11】あなたは次のジャンルの音楽をどのくらい聴きますか。

	聴かない	あまり聴かない	どちらとも いえない	ときどき聴く	よく聴く
A J-POP	1	2	3	4	5
B ポップス・ロック	1	2	3	4	5
C ジャズ	1	2	3	4	5
D クラブ・ダンス	1	2	3	4	5
E クラシック	1	2	3	4	5
F ワールドミュージック	1	2	3	4	5
G その他	1	2	3	4	5

	そう思わない	どちらかといえばそう 思わない	どちらとも いえない	どちらかといえばそう 思う	そう思う
【問 12】あなたは学内演奏会や団内演奏会等の催しに積極的に参加しようと思いますか。	1	2	3	4	5
【問 13】あなたは大規模の編成以外の小編成のアンサンブルをしますか。	1	2	3	4	5
【問 14】あなたはクラシックの演奏会に積極的に行こうと思いますか。	1	2	3	4	5
【問 15】あなたは演奏する曲の勉強をよくしますか。	1	2	3	4	5
【問 16】あなたはクラシックに関する知識をもっと増やしたいと思いますか。	1	2	3	4	5

【問 17】あなたのクラシック CD 保有枚数はどのくらいですか。

1 . 10 枚未満	2 . 10 ~ 29 枚	3 . 30 ~ 49 枚
4 . 50 ~ 99 枚	5 . 100 枚以上	

【問 18】あなたはスコア（総譜）を何冊持っていますか。

1. 5冊未満	2. 5～9冊	3. 10～29冊
4. 30～49冊	5. 50冊以上	

【問19】あなたは自分の演奏技術にどのくらい自信がありますか。

1. ない	2. あまりない	3. どちらともいえない
4. どちらかといえばある	5. ある	

【問20】あなたは演奏する曲に自分のパートのソロが無ければ、つまらないと感じますか。

1. そう感じない	2. あまり感じない	3. どちらともいえない
4. どちらかといえば感じる	5. 感じる	

	そう 思わない	どちらか といえば そう 思わない	どちらか とも い え ない	どちらか とい え ば そ う 思 う	そう 思 う
【問21】あなたは演奏する際、自分だけが満足できればよいと思いますか。	1	2	3	4	5
【問22】あなたは自分のためだけでなく、観客(聴衆)のために演奏しようと思いますか。	1	2	3	4	5
【問23】あなたはこれ以上自分の能力を向上させる機会を得られなければ、この団にとどまる必要はないと思いますか。	1	2	3	4	5
【問24】あなたは演奏をされていてオーケストラがひとつになる瞬間を求めますか。	1	2	3	4	5
【問25】各々の技術よりも全体の芸術性を求めますか。	1	2	3	4	5
【問26】他人の音楽解釈を受け入れられますか。	1	2	3	4	5
【問27】あなたは自分の感情を演奏に込めますか。	1	2	3	4	5

【問28】あなたは次の相手とどのくらいの頻度で遊びますか(交流しますか)。

	あ ま り な い	年 に 1 ～ 2 回	月 に 1 ～ 2 回 ほ ど	週 に 2 ～ 3 回	ほ ぼ 毎 日
A 先輩	1	2	3	4	5
B 同回生	1	2	3	4	5
C 後輩	1	2	3	4	5

【問29】あなたは次の事柄に対してどの程度満足していますか。

	不満である	どちらかといえば 不満である	どちらとも いえない	どちらかといえば 満足している	満足している
A 先輩	1	2	3	4	5
B 同回生	1	2	3	4	5
C 後輩	1	2	3	4	5
D 自分のパート	1	2	3	4	5
E 団の人間関係	1	2	3	4	5
F 団の雰囲気	1	2	3	4	5

【問 30】あなたは次の相手からの評価に対してどの程度満足していますか。

	不満である	どちらかといえば 不満である	どちらとも いえない	どちらかといえば 満足している	満足している
A 先輩	1	2	3	4	5
B 同回生	1	2	3	4	5
C 後輩	1	2	3	4	5
D 自分のパート	1	2	3	4	5

【問 31】あなたは打ち上げにどのくらい参加しますか。

1 . 参加しない	2 . 4 ~ 5 回に 1 回	3 . 2 ~ 3 回に 1 回	4 . 毎回参加する
-----------	------------------	------------------	------------

【問 32】あなたは次の相手とどれくらい話をしますか。

	ない	あまりない	どちらともいえない	ときどきある	よくある
A 先輩	1	2	3	4	5
B 同回生	1	2	3	4	5
C 後輩	1	2	3	4	5

	そう 思わない	どちらか といえ ばそう 思わ ない	ど ち ら と も い え な い	ど ち ら か と い え ば そ う 思 う	そう 思 う
【問 33】あなたの発言は影響力があると思 いますか。	1	2	3	4	5
【問 34】あなたは他の人に影響を与えること ができると思いませんか。	1	2	3	4	5

	そう 思わない	ど ち ら か と い え ば そ う 思 わ な い	ど ち ら と も い え な い	ど ち ら か と い え ば そ う 思 う	そう 思 う
【問 35】あなたは学業よりもサークル活動を優 先していますか。	1	2	3	4	5
【問 36】あなたはサークル活動をする上で、それ なりに目標を設定していますか。	1	2	3	4	5

	そう 思わない	ど ち ら か と い え ば そ う 思 わ な い	ど ち ら と も い え な い	ど ち ら か と い え ば そ う 思 う	そう 思 う
【問 37】あなたはサークル活動に打ち込みたい(打 ち込んできた)と思いませんか。	1	2	3	4	5
【問 38】サークル活動をとおしてオーケストラを やることは学生生活において意義があると思いま すか。	1	2	3	4	5
【問 39】あなたは自分にとってやりがいのある曲 を演奏させてもらえないならサークルにいても仕 方がないと思いませんか。	1	2	3	4	5

【問 40】あなたは自分の気分や精神状態がどの程度演奏に影響しますか。

- | | | |
|-------------|--------------|---------------|
| 1 . 影響しない | 2 . あまり影響しない | 3 . どちらとも言えない |
| 4 . わりと影響する | 5 . すごく影響する | |